

## 三番瀬自然環境調査について

平成 19 年 10 月 23 日  
千葉県環境生活部自然保護課

### 1 平成 18 年度調査の評価について

前回の小委員会に引き続き、下記ポイントを中心に平成 18 年度三番瀬自然環境調査の結果の評価を行う。

#### (1) 評価のポイントと前回の小委員会における主な意見

底質調査において、市川航路周辺の浅海域や塩浜護岸前面付近で、補足調査や平成 14 年度調査に比べて平成 18 年度調査では、中央粒径が小さくなり、シルト粘土分が高い値を示すなど変動が見られたこと。

- ・干潟や浅海域への外力への変化の解析が必要。(清野委員)
- ・三番瀬を含め、その周辺の流況変化等を整理していただいたほうがよいのではないか。(野村委員)
- ・シルト・粘土分は、猫実川河口で増えているというよりは、市川航路のほうから流れてきている感じもする。(蓮尾委員)

底生生物調査において、平均個体数が、平成 14 年度調査や平成 18 年度調査の値が補足調査にくらべて小さくなっていること。

底生生物調査の湿重量においては、平成 18 年度調査の値が、補足調査や平成 14 年度調査の値に比べて、特に春季・夏季における数値が小さくなっていること。

- ・水温や塩分のデータの収集が必要。(清野委員)
- ・環境データと生物の量との関係等のデータの解析を、いろいろな面から進めていく必要がある。(望月委員)
- ・台風などのイベント、アオサの大量発生などの現象も含め、慎重な解析をする必要があり、その枠組みができていない。それが今後の課題となるのではないか。(望月委員)
- ・重要種・主要種について、種ごとの分析をもう少し整理する必要がある。(望月委員)
- ・アサリの漁獲量なども考察に必要。(清野委員)
- ・アサリの減少については、青潮、大規模出水及びアオサの発生というイベン

トとの関係に注目することが重要と考える。シルト・粘土等、底質と生物量との関係は説明が難しい。アサリ以外の生物についても何らかのインパクト、イベントからの影響という感じを受ける。(調査機関：(株)東京久栄)

- ・市民運動とからめたアオサ調査を行ってはどうか。(野村委員)
- ・「三番瀬の日」のようなイベントで、市民にアオサ調査をしていただければ。(蓮尾委員)
- ・アオサの調査については、21年度の藻類調査でやるか、他の方法でやるかも考える必要がある。(望月委員)
- ・江戸川放水路のデータを出して欲しい。(野村委員)
- ・今回の台風の影響については、チェック体制が欠けていたのではないかと考えられるが、それには相当の予算が必要と思われるので、ちょっと難しいのではないかと。(野村委員)
- ・県の水産部局や国土交通省の調査結果を提供いただく体制を整えたらどうか。(蓮尾委員)
- ・イベントが、三番瀬の自然環境に及ぼす影響を把握する上では、関係機関の既存データでは不足することが考えられる。今後の研究課題を整理する必要がある。(望月委員)

群集組成の類似度による海域区分(類似度0.3区分)では、猫実川河口周辺において、平成14年度調査において主要種であったウミゴマツボやニホンドロソコエビに変わり、平成18年度調査では、コケゴカイ、ミズヒキゴカイ、イトゴカイ科が高い構成比を示したこと。

- ・粗砂との関係を見る必要がある。(清野委員)

その他各委員においてポイントであると考えること。

#### 第1回小委員会 望月委員まとめ

- ・底生生物調査は、調査方法による誤差や、調査時期のずれ、潮時のずれなど、大きな誤差を含んだ結果であり、こうした調査誤差を超えて本当に意味のある変化を、現在利用可能なすべてのデータの中から、いかに捉えるか考える必要がある。また、本当に変化がありそうな場合には、その理由も含めて考えなければならず、理由になりそうな現象が見つければ、今度は、そこに調査の焦点を当てる必要がある。
- ・環境データと生物の量との関係等のデータの解析を、いろいろな面から進めていく必要がある。
- ・台風などのイベント、アオサの大量発生などの現象も含め、慎重な解析をす

- る必要があり、その枠組みができていない。それが今後の課題となる。
- ・ 外来生物や社会的に重要な生物についての独自分析ができていないため、今後考えていく必要がある。
  - ・ 流況調査の問題について、それを 20 年度調査にいかにか活かすかを考える必要がある。
  - ・ 今後、アオサ調査がひとつの課題と考えられるため、アオサに関する情報を収集し、再度議論したい。

( 2 ) 9 月 25 日の小委員会で出された検討事項

平成 18 年度の調査でアサリの個体数、湿重量が過去の調査に比べて小さく なっていることは、平成 17 年にアオサが大発生したことが原因ではないか。

別添参考資料 1 のとおり平成 17 年度に大量に発生したとの調査結果が出ている。詳細なアサリ、アオサのデータは、現在収集中。

行徳可動堰の開放が生物に影響を及ぼしているのではないか。

行徳可動堰の運転実績は別添参考資料 2 のとおり

近年ではほぼ毎年開放されているが、平成 3 年から 10 年までは 運転実績がない。

平成 13 年度から 15 年度にかけて国土交通省が実施した江戸川 放水路からの出水による三番瀬の環境変化の調査の結果のまとめは別添参考資料 3 のとおり

報告書全文は、

[http://www.mlit.go.jp/river/press/200401\\_06/040507/040507-mokuji.html](http://www.mlit.go.jp/river/press/200401_06/040507/040507-mokuji.html)

参照。

## 2 平成 20 年度以降の調査の進め方と前回の小委員会における主な意見

平成 20 年度以降の調査についても、再生会議からの意見書（平成 18 年 12 月 25 日付の「三番瀬自然環境調査のあり方」及び「市川市塩浜護岸改修事業に係るモニタリング手法」について）に基づき実施する。

### （1）年次計画（案）

別添資料 3 のとおり実施する。

なお、評価委員会、小委員会の検討などを、今後実施する各調査の事業設計に活かせるよう考慮する。

### （2）総合解析

平成 18 年度から 21 年度の調査について、評価委員会（小委員会）において、三番瀬の自然環境の把握のために解析が必要と判断された項目について解析を行う。

- ・ 18 年度底生生物調査の結果、生物の状態が悪くなっている可能性があるので、測点を絞って追加調査をしてはどうか。（蓮尾委員）
- ・ 18 年度のデータだけで判断するのは難しい。過去のデータも含めて再度データ間の検討をした上で、明確な減少傾向が出るのであれば、それから緊急調査を考えてはどうか。（望月委員）
- ・ 現在のデータで変化している生物を、その特徴で分けて検討してはどうか。（野村委員）

### 第 1 回小委員会 望月委員まとめ

- ・ 再度、生物、底質、江戸川放水状況等の過去のデータの洗い直しと再分析を行い、大きな変化がある事項が明確になった段階で、追加調査を要請することとする。
- ・ イベント時のモニタリングについては、まず出水時の対応に関して、関係機関からの情報を収集した上、今後、継続して議論していくことを、三番瀬評価委員会への意見としたい。